

「臨床」に思う

皆藤 章

心理療法の実践に携わっていると、ほんとうにさまざまな、この実践においてのみもたらされる「出会い」がある。ユング派分析家のジェームス・ヒルマンがソウル・メイキングという考え方を提唱したのは、もうずいぶん前になるが、ヒルマンは次のように述べている。「心理的過程というのは、もろもろの事象から心理学を築くことではなく、もろもろの事象をとおしてころを創造していくことである。すなわちそれは、ソウル・メイキングである」。クライアントは、最初の事実である「出会い」という事象をとおしてころを創造していくプロセスを生きようとする。この実践においてのみ、と強調した所以である。ころが創造されていくこと、このことは心理療法の本来の姿勢であると筆者は考えている。

ところで、ころが創造されていくことという表現をすれば、河合隼雄も明確に述べるように、われわれの人生そのものが創造であると言うこともできる。そうすると、「この実践においてのみ」と言えるような「出会い」というのは、実はわれわれの人生の営みのなかに潜在的にあるということなのであろうか。

ひとつの見方としては、おそらくこのような広がりもあって、「臨床」ということばがさまざまな実践・学問領域において用いられるようになったのではないかと思う。気楽に言えば、それはそれで意味深いことのように感じられる。

筆者はかつて、「臨床」とは「人間がある世界から別の世界へ向かおうとする変容のプロセスに、現実とのかかわりを配慮しながらかかわる作業である」と述べたことがある。いまもその位置づけは変わっていないが、ここでさらに、それは間違いなく苦難の道であり、ころが創造されていくということは人生のすべてを賭けたプロセスであると付言しよう。そして、それこそが「臨床」であり、この姿勢をもってはじめて、「出会い」はたんなる形式ではなく意味ある事象となるのである。それは、「心理療法の実践においてのみ」もたらされる「出会い」である。このように思うと、「意味深い」などととても気楽には言っておれなくなる。「臨床」を冠するさまざまな実践・学問領域は、このことばの重みをどのように受けとめているのであろう。時流だから、では済まされないことは言うまでもない。

それでは、こころが創造されていくというのは、どういうことだろうか。「創造」とは何なのか。さらには、心理療法とはいったい何なのだろうか。このような疑問がたちまちのうちに湧いてくる。そして、そのどれひとつとして、筆者には答えることができない。正確に言えば、近代科学の枠組みでは答えることができない。なぜなら、それらはきわめて「主観」の営みだからである。ヒルマンの語りに戻ってみれば、そのことがよく了解できる。

「臨床」は「主観」の営みである。近代科学の知では答えることのできない「私」という人間の生き方を語ろうとする営みである。それは、他ならぬわれわれひとりひとりが自身の人生をいかに生きようとしているのかに関わっている。この意味で、われわれの人生そのものは創造なのである。このような姿勢をもって、「臨床」というきわめて個性の営みがいかなる知をもたらすのか、筆者もまた人生のすべてを賭けてコミットしていこうと思う。